

はじめに

文明十二年（一四八〇）、九州の博多を一人の文人が訪れた。陸路、大宰府から北上して、夕暮れ時に博多に入った彼は、翌朝眼前に広がる光景を次のように記している。

「前に入海遙かにして、志賀の島を見渡して、沖には大船多くかかれり。唐人もや乗けんと見ゆ。左には夫となき山ども重なり、右は箱崎の松原遠く連なり、仏閣僧坊数も知らず、人民の上下門を並べ、軒を争ひて、その境四方に広し」（『筑紫道記』新校群書類従 第三三六）

鳥瞰図を見るような巧みな描写で、格調高く、けだし名文と言うべきだろう。この旅人の名は、飯尾宗祇といい、当代第一の連歌師であった。

多少の文飾はあるにせよ、都に暮らし、各地をめぐってきた宗祇をして、その殷賑ぶりを語らせた「博多」は、一方で、文献史家に中世文書の遺存の悪さによる史料的な研究の困難さを嘆かせている。博多遺跡群の考古学的な発掘調査は、一九七七年（昭和五二）の福岡市営地下鉄の建設に先立つ調査以来、四〇年以上、二〇〇地点以上に上り、多くの知見を重ねてきた。発掘調査の成果は、文献史学の欠を補い、かつ文献史料ではうかがいしれない都市景観や庶民生活について雄弁に語りかけてくれる。

福岡県福岡市博多区、その博多湾に面した一帯を、旧博多部と呼ぶ。旧博多部とは、明治二十二年（一八八九）市制

がしかれ市名が福岡市と決まった後の呼称であり、江戸時代には筑前黒田五二万石の藩都が置かれた福岡と並んで、商人の町博多があった。現在の行政の地名表示の上では、区名・駅名に名を留めるだけのこの博多部こそが、古代末以来中国・朝鮮との貿易で栄えた都市「博多」の地にほかならない。

昭和五十二年（一九七七）、博多遺跡群に初めて考古学のメスがはいった。博多遺跡群は、中世都市「博多」の遺跡である。福岡市教育委員会が設定した遺跡の範囲は、東を石堂川、西を博多川に画され、南は出来町公園から藤田公園を結ぶ線、北は対馬小路あたりまでで、約一・六平方キロの面積を持つ。

本論に入る前に、現代の博多を訪ねながら、発掘調査の成果を中心に、中世の博多を探ってみよう。

中世前半の港

博多の夏は、祇園山笠であける。七月になると、町のあちこちに博多人形で飾った飾り山笠がたち、十日からは、締め込み姿の男たちがかき山笠をかいて町内を疾駆する。そして、十五日早朝、博多の町々をかけめぐってそのタイムを競う朝山で、ファイナルとなる。この博多祇園山笠が奉納されるのが、博多の西端に鎮座する櫛田神社である。

櫛田神社は、社伝では、天平宝字元年（七五七）鎮座とも、平安時代の末、平清盛によつて肥前国神崎荘（佐賀県神埼郡神埼町）の櫛田神社から勧請された神社ともいうが、史料の根拠は薄い。遅くとも、鎌倉時代中頃には存在したようである。この付近は、鎌倉時代末期には鎮西探題がおかれ、九州の政治・軍事の中心となっていた。

櫛田神社から冷泉小学校跡地（二九九八年閉校、大乗寺跡）をはさんだ北側に冷泉公園がある。昼食時には、弁当を持ったOLでにぎわうこの公園の下には、古代末から中世初めの港が眠っている。冷泉公園のすぐ東側で行った発掘調査では、最下層の泥土層から山積みになった白磁の碗や皿などが見つかった。十二世紀初め頃、船から積み荷を陸揚げした際に、船の中で壊れたものを一括して捨てたと考えられている。宋から渡航して来た、陶磁器をはじめさまざ

はじめに



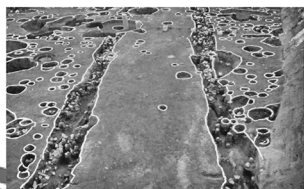
石壘展示室（元寇防塁）



寺中町に残る中世街路



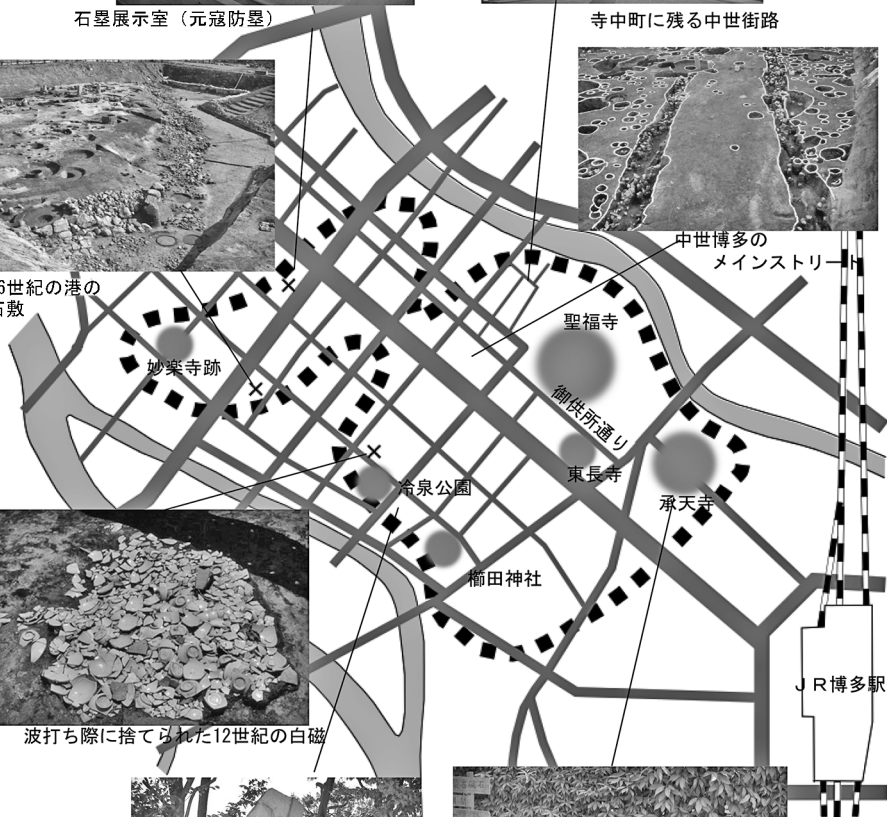
16世紀の港の
石敷



中世博多の
メインストリート



波打ち際に捨てられた12世紀の白磁



大乘寺跡の板碑 14世紀



日宋貿易船の碇石

図1 現代の博多に探る中世の博多(写真は福岡市埋蔵文化財センター提供)

まな珍奇な荷を満載した船は、博多湾の沖合に浮かぶ能古島や志賀島の島影に碇をおろし、小舟で博多の港を往来したのである。

博多綱首

博多の東辺には、聖福寺・承天寺の二大寺がその偉容を誇っている。聖福寺は、宋から帰国した栄西が最初に開いた寺と言われ、「扶桑最初禪窟」という額が山門に掲げられている。都心に豊かな緑を提供している寺地は、創建前は宋人の百堂の跡であつたと伝えられている。承天寺は、聖福寺の南に建てられた寺である。現在は、かつての鉄道敷地や道路によつて寺域が著しく縮小しているが、もとは聖福寺に隣接して広大な敷地を誇っていた。仁治三年（一二四二）、宋から帰国した聖一國師円爾をむかえて、謝国明が建立した。

十一世紀から十三世紀当時、博多での貿易を担っていたのは、宋から来た商人たちであつた。彼らは、博多に家を構え、妻をめとり、子をなした。そして、宋・高麗と博多とを往来し、貿易を行ったのである。彼らを称して「博多綱首」という。

栄西の渡宋にあたつては、博多綱首張国安、通事李徳昭らとの交わりも伝えられており、聖福寺創建に博多綱首らの後押しがあつたことが推測される。

謝国明は、櫛田神社の近くに家を構え、日本人の妻を迎えて子をなしていた。また、玄界灘に浮かぶ宗像神社領小呂島（福岡市西区）の地頭職を持ち、その一方で筥崎宮（福岡市東区）にも帰属していた。さらに、円爾が宋で学んだ径山万寿禅寺が火災にあつた際には、円爾の勧めをいれて、復興のための材木一千枚を日本から送つたという事跡も残されている。

博多綱首の活躍を示す資料は、発掘調査でも多く見つかつている。聖福寺や承天寺にも近い地下鉄祇園駅の調査で